

ニューツーリズムとしての文化観光 —対立から共生の視点を通じて—

富本真理子

岐阜女子大学 文化創造学部文化創造学科
(平成27年11月20日受理)

Study on Cultural Tourism as New Tourism : —Through the View from Opposition to Symbiosis—

Department of Cultural Development, Faculty of Cultural Development,
Gifu Women's University, 80 Taromaru, Gifu, Japan (〒501-2592)

TOMIMOTO Mariko

(Received November 20, 2015)

要 旨

本稿では、主に第2次世界大戦後に日本で発生したマスツーリズム全盛期以降の文化観光の概念を整理し、文化と観光の関係からその概要を表した。

その結果、文化観光は、文化と観光が共生の関係にあるニューツーリズムの一つとして捉えることが妥当であり、「日本の歴史、伝統といった文化的な要素に対する知的欲求を満たすことを目的とし、個人的文化的交流の重視、文化の持続可能性への配慮といった文化的側面への共生の視点がみられる持続可能な観光である」と言えることを示した。

<キーワード> 文化観光, 対立, 共生, ニューツーリズム, マスツーリズム

I. はじめに

21世紀にはいり、マスツーリズム (mass tourism) に一定の価値を認めつつも、その弊害を乗り越えるために出現したニューツーリズムに代表される新しい観光の進展がみられ、観光形態も多様化している。一方で、文化の捉え方も、文化芸術やクラシック音楽等いわゆるハイ・カルチャーだけでなく、生活文化やサブ・カルチャー等までその対象が広がり、市民権を得ている。その結果、観光

資源も様変わりしている。

そのような状況の中、多様化する観光や文化の概念に影響を受け、文化観光そのものが一体何を表し、何を目的としているか見えにくくなっている。

その結果、文化観光に関する議論においても、それぞれの立場においてとらえ方が違うため、話がかみ合わない場面に遭遇することがある。

従来のように、観光と文化は、文化財保護の視点から対立関係にあるという立場があ

り、一方では、積極的に文化資源を地域活性化のために観光資源として活用しようという立場がある¹⁾。特に、前者の立場はある程度理解できるものの、マスツーリズムに代表される物見遊山的な観光のイメージを強く引きずっている傾向があり、新しい観光の本質にそれほど理解が及んでいない。

観光と経済の関係ばかりが注目される風潮がまだ存在する中で、観光と文化の関係を新しい視点で考察することは、意義がある。

本稿では、主に第2次世界大戦後に日本で発生したマスツーリズム全盛期以降の文化観光の概念を整理し、文化観光がニューツーリズムであることの必然性を強調するとともにその概要を表すことを目的とする。

II. マスツーリズムとニューツーリズム

1. 観光と文化の関係～対立から共生へ～

文化観光について論じる前に、観光形態の変化と、それに伴う観光と文化の関係について若干の考察を試みる。

安村克己(2001, pp. 48-50)によれば、マスツーリズムとは、観光が大衆化して、大量の観光者が発生する現象であり、先進諸国では、1980年代から1990年代にかけて、そのピークを迎えたという。その一方で、1970年代には、マスツーリズムの拡大に伴う諸問題、すなわち、観光地の文化変容、犯罪や売春の発生、環境の汚染や破壊などが顕在化したと述べている。すなわち、大量生産・大量消費型のマスツーリズムがもたらす観光地の文化への負のインパクトが注目され、文化財保護の観点から、文化と観光(マスツーリズム)の対立的な関係が認識されていた。

一方で、大量消費社会を背景としたマスツーリズムに対して、ポスト消費社会に適合する新しい観光が出現することは自然な流れ

とも言える。マスツーリズムの弊害や行き詰まりを乗り越える新たな観光は、1980年代から国際的に盛んに用いられるようになった「もうひとつの観光」という意味をもつ「オルタナティブ・ツーリズム(alternative tourism)」と呼ばれるものである。

Pearce(1992, p. 18)によれば、オルタナティブ・ツーリズムとは、個人や地域による交流の発展過程としての旅行であり、ホストとゲストの個人的文化的交流と相互理解、連帯と平等を目指すのがその目的で、特に両者間のふれあいについて強調されているのが特徴である。

オルタナティブ・ツーリズムと似た概念に「サステイナブル・ツーリズム(sustainable tourism)」がある。これは、国連環境開発世界委員会(World Commission on Environment and Development)による“*Our Common Future*”と題するブルントラントレポート(1987年)において提唱された、持続可能な発展(sustainable development)という概念を実践する産業として、ブラジルのリオ・デ・ジャネイロでの第2回地球サミット(1992年)で認定された観光産業のことである(Holden, 2000, p. 164)。この「持続可能な観光という概念は、環境に対する観光のインパクトを考えることから始まったが、環境アメニティを尊重する持続可能性と文化的側面からの持続可能性を位置付けることは非常に類似している」(Throsby, 2001, p. 130)とされ、ここに観光と文化の関係に大きな変化、文化の持続可能性を念頭においた観光開発、すなわち、対立から共生関係になってきていることがわかる(図1)。

さらに、同様の新しい観光を表す用語としてニューツーリズムがあり、後述するように日本では多用されている。ニューツーリズムという用語は、Poonによって盛んに用いら

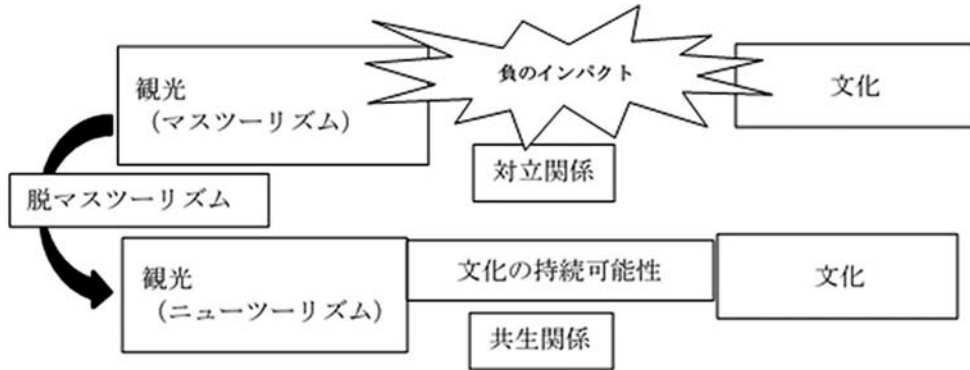


図1 マスツーリズム、ニューツーリズムと文化の関係

れ (1993, p. 11), その特徴としては, 従来の規格化された商品から, 細分化, 融通化とともに, 異業種間提携がなされ, 環境重視志向, カスタマイズ化傾向があると指摘している。消費社会の進展に伴い, 観光のビジネス面からの変化をとらえて「新しい」と捉えている点が特徴である。すなわち, マスツーリズムの成熟は, ビジネス面でも変化をもたらしている。

このように, 文化と対立的であったマスツーリズムを克服するべく出現したニューツーリズムは, 個人的文化的交流の重視, 文化の持続可能性への配慮といった文化的側面への共生の視点がみられる。以上のまとめとして, 図1では, マスツーリズムとニューツーリズムにおける文化との関係を表した。

このように観光という用語をひとくくりに表現することは, 文化との関係において混乱をきたす要因になっていることがわかる。観光にも, 多様な形態があることの理解が足りていない状況がある。

2. ニューツーリズムについて

なお, ニューツーリズムという用語は, 現在, 日本では, 観光庁を中心に多用されている。前述の Poon によるニューツーリズムと

いう用語を念頭においているのか, あるいは単に「新しい観光」という意味で「ニューツーリズム」という用語が使用されたのか, 詳細な経緯は不明である。本論文では, 観光の新しい潮流を表す用語として, この「ニューツーリズム」を使用することにする。

さらに, 日本では, 「着地型観光」「観光まちづくり」という地域住民が主体となった新しい観光も 1990年代から模索され始めており, どれも, マスツーリズムで行き詰まった観光を克服し, 観光客を受け入れる地域が主体となった「新しい観光」という意味であると考えられ, その用語は枚挙に暇がない。新しい観光に関する用語については, 表1で表した。

また, 観光庁では (2010), ニューツーリズムの中で, その活用する観光資源に応じて, エコツーリズム, グリーンツーリズム, ヘルツーリズム, 産業観光, 文化観光等の用語を挙げている。新しい観光に関する用語がたくさんあることは, 混乱を招く原因にも成り得る。

また, 観光庁は, 文化観光をニューツーリズムの範疇に位置付けている点にも注目したい。

なお, このように, ニューツーリズムが台

表1 新しい観光に関する用語

新しい観光
ニューツーリズム, オルタナティブ・ツーリズム, サステイナブル・ツーリズム, 自律的観光 (石森秀三, 2001), 観光まちづくり (西村幸夫, 2009), 常在観光 (須田寛, 2002) (井口貢, 2005), 地域ツーリズム (佐々木一成, 2008), 着地型観光 (尾家建生, 金井萬造, 2008年), コミュニティ・ツーリズム (茶谷幸治, 2008) 等

頭してきた現在でも、それは、マスツーリズムに完全にとって代わったわけではない。あるいは、マスツーリズムが変化して、ニューツーリズムになったとも言えない。依然、マスツーリズムは存在しているし、ニューツーリズム的な要素を取り入れようとしていることも見受けられる。こういった同時並行の状況もますます観光という言葉に対する理解を困難にしている。

Ⅲ. 文化観光について

1. 広義の文化観光

そもそも、文化観光は、Throsby が指摘するように (2001, p 128), 「すべての観光は、文化的側面を持っている」ことから、マスツーリズムの先駆けとして知られる 19 世紀の欧州グランドツアーも文化観光としてとりあげることが一般的である。あるいは、マスツーリズムという概念がなかった時代でも、人々は何等かの文化的要素を求めて旅をしていたと考えられ、古今東西存在したといっても過言ではない。

そのため、本稿では、広義の文化観光を「主として人文観光資源を中心とした歴史・文化の鑑賞や、これらにかかわる観光行動に対して用いられることが多く、自然観光資源を中心とした自然観光 (nature tourism) に対比して用いられる」という立場で (北川, 2004, p.

4), 捉えることにする。ここでは、ニューツーリズムであるか否かという観光形態に関わらず、古今東西で存在した文化観光を広義の文化観光とした。

しかし、この広義の文化観光の概念は、ニューツーリズムが進展している現在では、必ずしも的確ではない。文化観光のあり方、方向性を示す必要があると筆者は考える。

近年になり、ニューツーリズムが出現すると、観光庁は、文化観光をニューツーリズムの範疇としているものの「日本の歴史、伝統といった文化的な要素に対する知的欲求を満たすことを目的とする観光である」(観光庁, 2010) としており、前述の広義の文化観光の定義とさほど変わらない。これについて、阿曾村が (2008, p. 295), 「文化観光という用語は、日本の行政関係者の間ですでに日常的に用いられているのであるが、その前提として特に文化観光の理論的な根拠が示されている訳ではない」と指摘しているように、「文化的要素を持つ観光」といった表層的な捉え方で、文化と観光の対立か共生かといった概念が、さほど考慮されていない点が残念である。

2. 文化と観光の関係からみた文化観光

前項で、広義の文化観光について考察したが、ここでは、もう少し文化観光の概念を絞っていききたい。

Richards, Greg (1996, pp 10-38) は、文化観光を定義づけることは困難であると指摘し、そもそも文化も観光もそれぞれ定義づけることが難しいことをその一因としている。さらに、文化観光の定義づけの困難さは、文化と観光の概念が時代とともに変化していることにも起因しているとも述べている。それは、文化と経済の概念の境界、ハイ・カルチャーとロウカルチャーの境界、文化と観光の境界が、近年、曖昧になってきていること

にあるとしている。しかも、文化観光は全く新しい現象ではなく、文化観光の文化の消費の範囲と消費される文化の形が変わったとも述べている。さらに実際に、変化を求められている観光商品の供給が、需要に追いついていないとも指摘をしている。

ここで、文化観光の多様性を理解するために、Richards が考察したように、これを文化と観光という2つの要素に分解し、座標表面上に表した(図2)。

横軸は、観光であり、従来型のマスツーリズムと、新しい観光のニューツーリズムを両極にして、観光形態の差異を表している。

一方縦軸は、文化であり、ハイ・カルチャーと、ポピュラー・カルチャー／生活文化等を両極にし、観光資源を表している。前者は、

普遍的なあるいは、グローバルな文化として、後者は、ローカルあるいは、サブ・カルチャーとしても捉えることも可能である。

この座標面上全体は、広義の文化観光を表し、「主として人文観光資源を中心とした歴史・文化の鑑賞や、これらにかかわる観光行動に対して用いられることが多く、自然観光資源を中心とした自然観光(nature tourism)に対比して用いられる」(北川, 2004, p. 4)と定義できる。

次に各象限の分析を試みる。

第I象限は、19世紀の欧州グランドツアーに代表されるような文化観光や、マスツーリズム全盛時代の団体旅行での有名観光地巡りが該当する。実は、観光というこのイメージがいまだに大きく、観光による文化

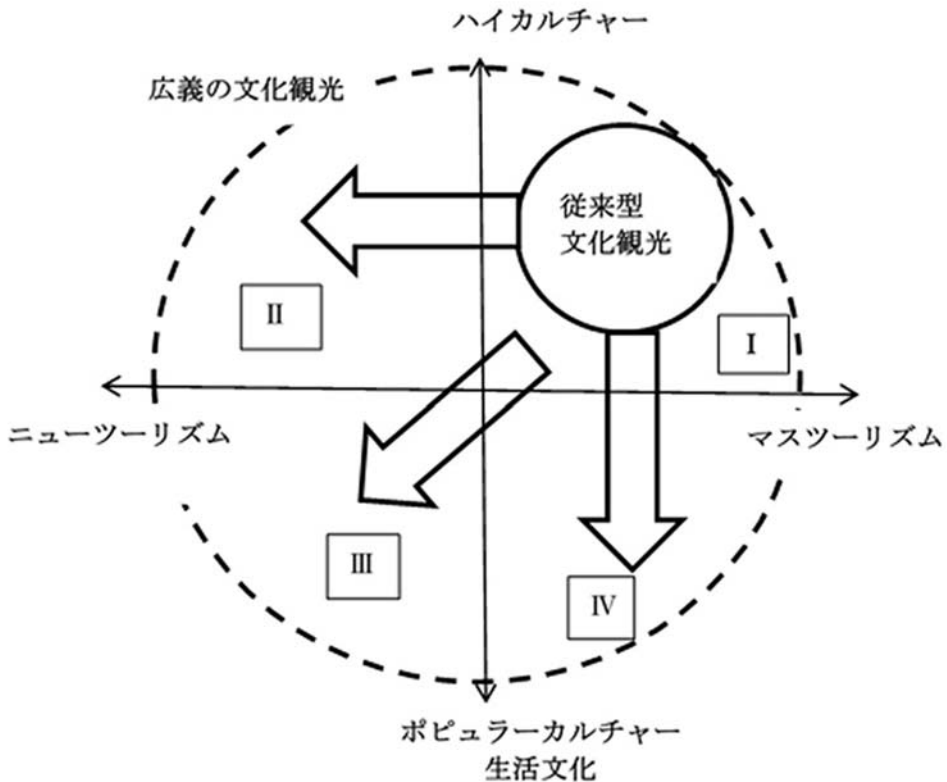


図2 文化観光の概念図

の損失・変容といった負のインパクトを過大評価する風潮のベースとなっている観光形態である。

第Ⅱ象限の観光資源は従来型の有名観光資源であるが、観光形態が、観光地の地域住民との交流や体験を含むツアーが想定でき、ニューツーリズムとしての特徴を持つ。世界遺産やミュージアムを現地の市民ガイドの説明を受けて巡るツアーなどがあげられよう。この分野では、普遍的、世界的な文化資源を当該地域が主体的に、持続可能な活用を進めていくことが重要であると考えられる。

第Ⅲ象限では、従来では観光資源とは想定されなかった文化資源を観光対象とし、かつニューツーリズムの特徴を備えるものであり、最近注目されている「まち歩き」などが該当する。この「まち歩き」については、茶谷(2008年)に詳しい。この分野は、後述するように進展するニューツーリズムや好調なインバウンド・ツーリズムの影響で最も注目される分野であると考えられる。

第Ⅳ象限は、同じく新しい切り口の観光対象を扱う団体旅行が想定でき、数年前にブームになった韓国への「冬のソナタ」ツアーなどが好例である。観光資源としては、新しいが、地域との関わりが希薄で一過性に終わる可能性がある。受け入れ地域が主体性を持ち、いかにニューツーリズムの形態にもっていかれるか、すなわち持続可能性が課題であると考えられる。

この図は、漠然とした文化観光を整理することにより、現在の文化観光の多様性の理解を助けると同時に、その課題などが見えてくるという利点がある。

3. 注目されるニューツーリズムとしての文化観光

McKercher, Bob と du Cros, Hilary が(2002,

p. 1), 「文化観光は、1970年代後半に、まったく別の分野の観光商品であると、観光業者や観光研究者の間では、認識され始め、特に訪問地の文化や遺産により深い理解を得るための旅行として理解され、大きな市場に断片的に存在していた。しかし、1990年代になり、文化観光は明確に大きな市場であると認識されてきた」と述べ、文化観光がマスツーリズムとは全く別の分野、すなわちニューツーリズムであることを示唆している。この流れは、前述の文化・環境の持続可能性という1990年代に始まったサステイナブル・ツーリズムという考え方と響き合う点がある。

ニューツーリズムの出現した背景、観光・文化の持続可能性、McKercherの指摘、あるいは、前述した観光庁の分類から、文化観光は、現在は、ニューツーリズムの一つとして捉えることが自然である。図Ⅱでいえば、第Ⅱ象限と第Ⅲ象限の比重が大きいと考えられる。

観光庁による定義を借りて文化観光を言い換えれば、「日本の歴史、伝統といった文化的な要素に対する知的欲求を満たすことを目的とする観光であり、個人的文化的交流の重視、文化の持続可能性への配慮といった文化的側面への共生の視点がみられる持続可能な観光である」とも言えよう。

4. 文化観光の観光資源の多様化

ニューツーリズムの進展に伴い、芸術文化やクラシック音楽などのいわゆるハイ・カルチャーだけでなく、生活文化やサブ・カルチャーと言われる領域まで文化観光の観光資源の多様化は著しい。前述の図2の第Ⅲ象限にあたる分野が特に、伸張が目覚ましい。この最大の理由は、マスツーリズム全盛時代では観光事業者が評価した観光資源を、ニューツーリズムやインバウンドツーリズムの進展

表2 観光資源の評価基準

ランク	基準・内容	代表資源名
特A級	わが国を代表する資源で、かつ世界にも誇示しうるもの。わが国のイメージ構成の基調となるもの。	富士山・摩周湖・法隆寺・姫路城・祇園祭・阿蘇山と外輪山
A級	特A級に準じ、その誘致力は全国的で、観光重点地域の原動力として重要な役割をもつもの。	芦ノ湖・天橋立・清水寺・高山の街並み
B級	地方スケールの誘致力を持ち、地方のイメージ構成の基調となりうるもの。	筑波山・浜名湖・有田陶器市
C級	主として、県民および周辺地域住民の観光利用に供するもの。	身延山・石神井池・広島城跡
以下D級	地域住民の利用。	

出典：「表Ⅱ-2観光資源の評価基準」

財団法人日本交通公社編『観光読本』東洋経済新報社、2004年、41ページ。

により、観光客やその受け入れ地域の住民が見出ししているからであると考えられる。

まず、外国人観光客が日本人とは異なる視点で観光資源を見出ししている点に注目したい。好調なインバウンド・ツーリズムが、インターネットの普及とともに、新たな視点の観光対象をもたらしている現象である。例えば、外国人観光客は、相撲部屋の朝稽古では究極の日本を感じ、谷中銀座商店街では日本人の飾らない素の部分を見て楽しみ、高野山の宿坊に泊まりそこで暮らす人とコミュニケーションを楽しむことが、取り上げられている（日本経済新聞2015/5/1）。NHKの報道番組では²、JR渋谷駅前のスクランブル交差点や、山梨県にある富士山と五重塔（戦後の建造物）が1枚の絵のように見えるというポイントが外国人観光客に人気があると報道

している。外国人からみた日本らしさ、日本人の日常生活や、地域住民との交流等は、従来なかった視点の観光資源である。

次に、観光客の受け入れ地域の住民は、そこに住まう生活者としての視点で観光資源を見出し、観光対象として磨きあげている点に言及したい。近年、京都で人気のまち歩き「まいまい京都」の事例がある³。そういった一連のニューツーリズムの活動には、その地域固有の生活に根ざす文化、サブカルチャーが、テーマとなりやすい。

マスツーリズム全盛時代では、日本交通公社（2004, pp. 38-41）が、観光資源を特A級からD級というようにランク付けし（表2参照）、それに優劣があるかのようなイメージを与えている。

しかし、ニューツーリズム台頭期にある2000年以降においては、このような観光資源の評価は、必ずしも妥当とはいえない。こういった評価基準を否定するわけではないが、問われるのは、地域固有の観光資源を、いかに魅力的な観光対象にするかというプロデュース力であると考えられる。表2でD級とされたものでも、ニューツーリズムでは、特A級に成り得る。近年、注目を浴びている「まち歩き」が、その好例であり、隠れた観光資源にストーリー性を持たせ新たな価値を付加したり、観光資源を通じた交流等も魅力的な観光対象としたりしている点で人気を呼んでいる⁴。

ニューツーリズムの進展やインバウンドツーリズムの隆盛により今後ますます、生活文化やサブカルチャー、ローカルカルチャーに対する関心が深まり、新たな観光資源が出現することが予想される。前述の図においては、今後ますます第Ⅲ象限に該当する観光に注目が集まると考えられる。

以上のように、観光資源の多様化は、グロー

バル化するニューツーリズムの大きな特徴であり、観光に携わる者の発想の転換が求められる時代となっている。

文化振興にいかに関与できるかを見極めることが重要であると考えられる。

V. まとめ

マスツーリズム全盛時代では、対立していた文化と観光の関係が、近年、共生的な関係になっており、「持続可能性」がキーワードとなっている。文化を対象とする観光であればこそ、文化の「持続可能性」への配慮は、当然である。そういった背景から、文化観光はニューツーリズムの一つとして考えるのが妥当である。

以上から、観光庁の定義を補足追加して、文化観光を定義すれば、「日本の歴史、伝統といった文化的な要素に対する知的欲求を満たすことを目的とし、個人的文化的交流の重視、文化の持続可能性への配慮といった文化的側面への共生の視点がみられる持続可能な観光である」と言えよう。文化を観光資源とすることはもとより、文化的・人的交流や文化の持続可能性への配慮を明記することが、文化観光の本質である。

ニューツーリズムの進展に伴い、文化観光の観光資源の多様化は著しい。地域住民の主體的な関わりやインバウンド・ツーリズムの進展に伴い、生活文化、サブカルチャー、地域文化の領域から今後ますます観光資源が掘り起こされるであろう。こういった観光振興が地域文化振興及び経済振興へとつながると考えられる。

現在、観光を地域文化振興に積極的に活用する視点を強調することは、時代の流れからいっても避けられない。そのために、文化と観光の関係を良好に保つニューツーリズムの展開に期待したい。その前提として、文化観光の概要や実態を確実にとらえ、それが地域

<引用文献>

- 1) 阿曾村智子「文化観光 (Cultural Tourism) に関する一考察：日欧比較の視点から」『文京学院大学外国語学部文京学院短期大学紀要』第8号, pp. 293-306, 2008年.
- 2) 井口貢『まちづくり・観光と地域文化の創造』学文社, 2005年.
- 3) 池上惇『文化と固有価値の経済学』岩波書店, 2003年.
- 4) 石森秀三「内発的観光開発と自律的観光」『国立民族学博物館調査報告』国立民族学博物館, 2001年.
- 5) Holden, Andrew, *Environment and Tourism*, Routledge, 2000.
- 6) 観光庁『ニューツーリズム旅行商品 創出・流通促進ポイント集 (平成21年度版)』2010年.
- 7) 観光庁「観光立国推進基本計画」最終更新日：2012年3月30日
<http://www.mlit.go.jp/kankocho/kankorikkoku/ki-honkeikaku.html> 2013/05/01最終確認
- 8) 観光庁「ニューツーリズムの振興」最終更新日：2015年6月25日
http://www.mlit.go.jp/kankocho/page_05_000044.html 2015/11/18最終確認
- 9) 北川宗忠編著『観光文化論』ミネルヴァ書房, 2004年.
- 10) 国土交通省『ニューツーリズム旅行商品 創出・流通促進ポイント集 (平成19年度版)』2008年.
- 11) Mckercher, Bob and du Cros, Hilary, "Cultural Tourism: Partnership Between Tourism and Cultural Heritage Management", Routledge, 2002.
- 12) 西村幸夫『観光まちづくり：まち自慢からはじまる地域マネジメント』学芸出版社, 2000年.
- 13) 尾家建生「地域が活きる着地型観光」同・

- 金井萬造編著『これでわかる！着地型観光
地域が主役のツーリズム』学芸出版社, 2008
年.
- 14) Pearce, Douglas G., “Alternative Tourism: Concepts, Classifications, and Questions” in *Tourism Alternative: Potentials and Problems in the Development of Tourism*, Smith, Valene. L. and Eadington, W. R. (eds.) A Publication of the International Academy for the Study of Tourism, 1992, pp. 15–30.
- 15) Poon, Auliana, *Tourism Technology and Competitive Strategies*, UK, CAB International, 1993.
- 16) Richards, Greg (eds), “Cultural Tourism in Europe”, CABI, 1996.
- 17) Throsby, David, *Economics and Culture*, Cambridge University Press, 2001 中谷武雄・後藤和子監訳『文化経済学入門 創造性の探究から都市再生まで』日本経済新聞社, 2002年.
- 18) 佐々木一成『観光振興と魅力あるまちづくり：地域ツーリズムの展望』学芸出版社, 2008年.
- 19) 須田寛「広域連携による新しい地域づくりをめざして」『北陸の視座 vol. 8 2002. 3』北陸建設弘済会, 2002年.
- 20) 茶谷幸治『まち歩きが観光を変える—長崎さるく博プロデューサー・ノート』学芸出版社, 2008年.
- 21) 富本真理子「地域文化振興に『まち歩き』が果たす役割—「まいまい京都」を事例として—」文化政策研究第8号, 日本文化政策学会, 2015年.
- 22) 安村克己「観光の歴史」岡本伸之『観光学入門：ポスト・マス・ツーリズムの観光学』有斐閣, 2001年.
- 23) 財団法人日本交通公社編『観光読本』東洋経済新報社, 2004年.
-
- 1 文化庁は2015年4月24日、有形・無形の文化財をテーマや地域ごとにまとめた18件を、「日本遺産」として初認定した。これまで文化財保護の立場をとる文化庁が、文化財を地域活性化のために観光などに活用するという政策転換であることが注目されている。
- 2 2015年4月8日（水）放送の「クローズアップ現代」では、スマートフォンを使った個人客の行動調査（ビッグデータ）を取り上げている。
- 3 詳細は、富本（2015）を参照されたい。
- 4 「長崎さるく」「大阪あそ歩」「まいまい京都」などの一連の「まち歩き」の流れについては、富本（2015）に詳しい。

